

Ⅱサムエル7章「あなたの王座はとこしえまで」

今日は敬老の日礼拝として礼拝を献げています。これまでの歩みを振り返ると共にこれから先のことにも目を向けることができますように。私たちキリスト者には永遠の御国での祝福が約束されているのですから、その約束と希望に基づいて、歩みたいと思います。

1. ダビデの思いに対して（：1～7）

ダビデは王として一つ一つのことを行ってきましたが、1節に「主は、周囲のすべての敵から彼を守り、安息を与えておられた」とあります。安息は主が与えておられたということです。

その安息の中で、ダビデは一つのことを思いつきました。それを預言者ナタンに話します。2節。立派な王宮に対して、神の箱が置かれている天幕があまりにも粗末に思えたのでしょうか。神の箱のための家、つまり主を礼拝するための宮を建てようと考えました。

ナタンは主がダビデとともにおられることをこれまで見てきたので、ダビデの心にある考えは主のみことろにかなうことであると判断したのでしょうか。

ところが、その夜、主のことばがナタンにありました。5～7節。これまで、神の箱は幕屋に置かれ、そこに主の臨在が表されました。主がイスラエルに杉材の家を建てるようにと「一度でも言ったことがあつたらうか」と言われます。ダビデの考えに対して、主はノーと言われたのです。

主は「幕屋にいて、歩んできた」と言われます。主が作るように命じた幕屋において臨在を表し、ご自身の民と共に歩んできました。主はご自身のことばに従うことを求めておられますし、みことばのとおりには礼拝する民と共に主はおられて、祝福してくださるのです。

また、ダビデは主のために善意をもって考えていました。しかし、信仰に基づいて考えたとしても、主のみことろにかなわないことがあります。箴言に「人の心には多くの思いがある。しかし、主の計画こそが実現する」（19:21）と言われているとおりのことです。

2. 主の約束・ダビデ契約（：8～17）

主はダビデが主の家を建てることは許しませんが、逆に主がダビデのためになさることがあると告げます。

主はこれまでダビデになさったことを振り返らせます。羊の牧者をしていた若い日のダビデを主が選び、サムエルによって油を注ぎました。そして、長い年月と様々な経験の後に、イスラエルの君主としました。また、主がダビデとともにおられて、彼を成功させ、大いなる名を与えてきました。

そのように主がダビデとともにおられることは、主がイスラエルとともにおられることの一部であると言われます。この箇所には「わが民イスラエル」ということばが繰り返されています。主がダビデになさってきたことは、主がご自身の民イスラエルになさってきたことの一部であると言われています。イスラエルを選び、ともにいて、祝福された主が、ダビデを選び、ともにいて、祝福されたのです。

私たちに対する主のみわざも、単に個人に対することだけではなく、主の民に対することと重なっているのです。そして、それぞれに対する主のみわざによって主の民が祝福されるのです。

主はダビデにこれからなさることを告げます。11節c。ダビデが主のために家を建てることを主は認めませんでした。逆に主がダビデのために「一つの家を造る」と言われます。その主がダビデのために造る家とは、建物のことではなく、ダビデの子孫、ダビデ王朝のことです。12節。

私たちは聖書から、このダビデから出る「世継ぎの子」とはソロモンであることを知っています。ソロモンの時にイスラエル王国がピークを迎え、王権は確かなものとなります。そして、ダビデには許されなかった主のための家を、ソロモンが建てることとなります。

「家」ということばに二つの意味が表されていることが分かります。ダビデは建物としての主の家のことを考えていますが、主は子孫、王朝としてのダビデの家のことを見ておられます。さらに、主はダビデの家を通して実現される永遠の救いの計画を持っておられます。それゆえに、ダビデの王座が「とこしえまでも堅く立て」られることとなります。

主はダビデの子孫を見捨てることはありません。15節。主の恵みはダビデの子孫から取り去られることはな

いのです。ダビデの王座は永遠に続きます。16 節。ダビデの王座が永遠であるのは、やがてダビデの子孫として生まれるメシアによって最終的に成就するまで受け継がれるからです。

ダビデに与えられたこの主の約束はダビデ契約と呼ばれます。「わたしの恵みを 彼のために永遠に保つ。わたしの契約は 彼にとって確かなものである。わたしは 彼の子孫をいつまでも 彼の王座を天の日数のように続ける」(詩篇 89:28-29)。主は契約を永遠に守られるのです。

神がこの契約を成就されたことを私たちは聖書によって知っています。ダビデの子孫としてお生まれになったイエス・キリストによって成就しました。イエスの母となったマリアに御使いガブリエルが言いました。「その子は大いなる者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また神である主は、彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その支配に終わりはありません」(ルカ 1:32-33)。イエス・キリストを信じる者たちの間に神の国が来て、その王座にキリストが着いておられます。そして、神の国は広げられ、やがてキリストが再臨されるときに、完全に成就するのです。イエス・キリストを信じる私たちも、キリストが王である御国の民とされているのです。

3. ダビデの祈り (: 18~29)

預言者ナタンを通して主のことばを聞いたダビデは、主の前に祈ります。主の約束があまりにも壮大であることに驚いて、また自分と子孫に対して恵み深いことに感謝して、祈ります。

18 節。「神、主よ」という呼びかけ、あるいは「神である主よ」という呼びかけを、ダビデはこの祈りの中で 7 回使っています。そのことで彼が神、主に対して恐れをもって祈りつつ、同時に親密さをもって祈っていることが伺えます。

「私は何者でしょうか」ということばから、詩篇 8 篇の似ていることばを思い起こします。「人とは何ものなのでしょう。あなたが心に留められるとは。人の子とはいったい何ものなのでしょう。あなたが顧みてくださるとは」(:4)。主の前でへりくだっていること、そして主の恵みの大きさに感謝していることが分かります。主が「ここまで導いてくださったこと」を感謝しています。

19 節。神、主が、ダビデの子孫のこと、「はるか先のことまで」教えてくださったこと、特別に扱ってくださることを驚き、感謝しています。20~21 節。神、主は、ダビデのことをよくご存知です。そして、ご自身のなさろうとしていることを教えてくださいました。22 節。神、主が大いなる方である、比類なき存在であると告白します。23~24 節。イスラエルに対する神のみわざを振り返り、神が特別に扱ってこられたこと、神の恵みと真実を賛美します。ここまで、ダビデは主の恵みを感謝し、主のみわざを賛美しています。

それに続いて、ダビデは願いを祈ります。25~27 節。主がダビデの家になさると約束されたことを、主が「とこしえまでも保ち、お語りになった通りに行ってください」と祈ります。主の約束に基づいて、願い、祈ることは大事です。

28~29 節。ここでも先の祈りと同じような祈りを繰り返しています。主がお語りになった約束の通りに、しもべダビデの家がとこしえに続き、とこしえに祝福されますようにと祈ります。

ダビデは主がお語りになったことの意味をすべて理解していたわけではないでしょう。しかし、主を信頼し、委ねて、「お語りになったとおりに行ってください」と祈りました。そして、そのように祈ることにより、平安と喜びが与えられたことだろうと思います。

神、主は私たちに対しても、みことばによって永遠の祝福を約束してくださっています。キリストが王として治める永遠の神の国に、キリストによって入ることができると約束されています。私たちのこれからの歩みが実際にどのように導かれるのかは分かりませんが、主を信頼して、委ねて祈りたいと思います。

イエス・キリストを信じる私たちは神の国の民とされ、王であるキリストに従う者たちとされています。やがて、キリストが再臨されるときに、神の国は完成し、私たちも御国に永遠に住まうこととなります。その永遠の祝福をいただいていることの感謝を新たにしましょう。

みことばによって永遠の祝福の約束をいただいている私たちも、主が約束のとおりに行ってくださいるように、そして主が賛美されるように祈り求めましょう。私たちの実際の歩みがどのように導かれるかは分からないとしても、主のみことばの約束を信じることで、平安と喜びが与えられるのです。